

葉集を読む

松岡 隆子

青時雨見てゐる余生とふ余白

醍醐喜美枝

余生とは文字通り余りの人生、即ち老後に残された人生のことである。何時からを余生といいのか、その判断は個々のケースによって異なるだろう。90歳を過ぎても元気で働いている人もいる世の中だ。今や余生は静かに過ごすというより、こころ豊かに過ごす時代になったと言えよう。これからの未知なる人生は全くの余白。その余白をどんな色に塗り上げていくのか、醍醐さんはきつと詩語を紡いで埋めていかれるに違いない。雨上がりの日差しの中、青葉に溜まった雨からはらはらと落ちる。その青い雫は今日の余白を染めていく。

休校の空高く吹くしやばん玉

梅澤 惇子

全国全ての小中学校と高校、特別支援学校に対して3月2日から春休みまで臨時休校を要請するという安倍総理大臣の突然の発言に日本中が騒然となった。卒業式も入学式もままならず、登校できぬ日が約三ヵ月続いた。無人の校舎や校庭

を見るのは忍びない思いだった。そんなある日、梅澤さんは広場でしゃばん玉を吹いている少女を見かけた。少女の明るい表情にほっとしながら、高々と飛んでゆくしゃばん玉に明日への希望を託した。

花水木ひと日誰とも会はずのまま

堀 真智子

コロナ禍の中、句会は休会となり仕事もリモートワーク。訪ねてくれる人もなく、訪ねてゆくことも出来ない。いつまでこんな状態が続くのだろうと鬱々として窓の外を見る。街路樹の花水木が一斉に咲き出し、街は春の明るさに満ち溢れている。外出の自粛を強いられている現状を淡々と受け止め、花水木の明るさに明日の光を見ている。その向日性に惹かれる。

他愛なき会話を少し春の月

田中 律子

近くのコンビニに用足しに行つての帰り、路地の角で空を仰いでいる親子連れに出会った。思わず足を止めて空を見上げると大きな春の月が輝いていた。その親子に出合わなかったらその日が満月だと気づかなかつただろう。

春の月は秋の月見のように改まって愛でるといふことはなく、偶々見上げて気づくことが多い。田中さんも誰かに教えられて春の満月に気がついたのだろう。二人で立ち話をしていてどちらからともなく気がついたのかもしれない。二三言他愛ない会話を交わす。春の月ならではの情趣である。

人の世に閑はりも無し夏の蝶

鈴木 富代